

『並には勝る女たちの夢』における二つの「インターヴァル」とその関係

江刺佳紘（東京大学大学院博士後期課程）

ONE、TWO、UND、THREE、AND の五章で編成された『並には勝る女たちの夢』（執筆 1932 年、以下『夢』）の UND のなかには、二つの異なるヴィジョンが書かれている。一つ目は、主人公ベラックワの文学宣言で、ベートーヴェンの音楽の休止のように巧みに「沈黙を叙述しよう」という野心が「沈黙」という語やその類語の反復によって実践的に表明される。もう一つは、一人称複数の語り手が、最初の二章の出来栄えを評価する際に示される。ベラックワのプログラムに十数ページだけ先行するこの場面で、we はベラックワをはじめとした自作のキャラクターたちの扱いに難儀する自分を「自作の素材の絶対的支配者」たるバルザックに対置する一方で、登場人物の制御不可能性を整然と説明することで、すべてのキャラクターを「機械仕掛けのキャベツ」として扱うバルザックの欺瞞を暴いてもいる。

本発表は、異なるレベルから展開される『夢』の二つのヴィジョンを詳しく読み、両者の関係を明らかにすることで、初期ベケットのフィクションの方法論を再考する。初期ベケットの方法論については、すでに多くの研究がおこなわれてきたが、ベラックワの文学宣言を、1937 年 7 月 9 日にベケットがアクセル・カウンに宛てた書簡内のプログラムの出発点とするのが定説で、we の文学観が議論の中心となることはほとんどない。たしかに、この手紙のなかには、ベートーヴェンへの言及、沈黙を優位に置く発想などのベラックワのマニフェストと一致する記述があるため、二つの連続性は疑い得ない。しかし、これまでほとんど考慮されてこなかった『夢』のもうひとつのプログラムは、以下に示す理由によって、初期ベケットの創作原理を別の角度から捉え直す可能性を秘めているように思われる。第一に、we による文学論はベラックワの計画に先行して書かれているため、その形成過程を辿ることができる。第二に、『夢』内の二つのプログラムでは、ベケットのキャリアを通じて散見される「インターヴァル」という用語がそれぞれ異なる意味で用いられているため、両者の照合はベケットの本質に関与するこのタームの性質の解明にも大きく寄与する。以上の理由から、本発表は『夢』内の二つのプログラムで使用されている二種類の「インターヴァル」の性質とその関係を詳述し、ベケットのフィクションの基礎を論じるための手筈を整える。

証言としてのベケット演劇－初期演劇における閉ざされた空間の表象

原田裕也(東京大学英文修士3年)

ベケットは戦後、劇作に取り掛かり、フランス語を創作のための主要言語に選んだ。この事実は様々な角度から考察され、伝記的な事実や言語に対する懐疑等によって説明されてきた。私はベケットが劇作に取り組むようになった一つの理由を、ベケットのヘテロトピアに対する関心によって説明しようと試みる。ヘテロトピアとはフーコーが使用した言葉で、現実が存在しながら、日常から逸脱した機能を果たす空間を意味する。ここでは特に社会の規範から外れた人々を隔離するための空間を指す。ベケットは創作活動の初期から、囚人、精神病患者など、監禁状態にある人々を描いてきた。フーコーによれば、劇場も一種のヘテロトピアであり、ベケットが初期の額縁舞台演劇において、舞台という閉ざされた空間を利用し、監禁された人々を描こうとしたと私は考える。

また本発表では、監禁された他者の痛みを演劇によって伝える、その方法に着目し、劇が証言の役割を果たしていることを指摘する。一般的にテスティモニー研究では、ホロコーストと第二次世界大戦のトラウマによる、証言の不可能性が指摘されてきた。しかし、ここでは、ベケットが抱いていた出生のトラウマに着目する。母胎内は理想化され、『並には勝る女たちの夢』で、ベラックワは *wombtomb* という表現を用いている。*Wombtomb* には他の作品に先駆けて、閉所に対する執着、生前、死後という時間の形式からの逸脱、言語化できない体験等が示唆されている。

したがって、精神病棟や監獄に対する関心は *wombtomb* に起源があると思われる。『マーフィー』では、エンドン氏が理想化されるが、この人物はマーフィーにとってあくまでも理解の叶わない他者である。このことは、他者の経験について語るができないことを意味する。そして、ベケットの戯曲においても、舞台上でヘテロトピアへの言及が見られるが、その所在はやはり外界にとどまっている。また、入子構造のように、舞台が閉ざされた空間であり、登場人物達は肉体的、精神的な痛みや苦しみを抱いている。舞台そのものが *wombtomb* のアナロジーなのか、円環的かつ直線的な、矛盾を孕んだ時間軸上、登場人物たちは自らの記憶や経験が客観的な根拠に基づいていることを確認しようとする。つまり、舞台上に証人を求める。しかし、『ゴドーを待ちながら』でのように証人は現れない。こうした状況で、観客が証人にならざるをえないのである。以上のように、本発表では他者と自己の痛みを表現することの困難さ、そしてその困難さを共有するためのベケット劇について論じたい。